

# 書簡体小説研究

——『若きウエルテルの悩み』と『宣言』の比較から——

渡 部 杏 美

## はじめに

『若きウエルテルの悩み』は発表当初から圧倒的な反響を呼び、当時のドイツ、とりわけ若い世代、さらにはヨーロッパ文学の中でも無視できない作品だったようである。その一因として、高橋義孝訳『若きウエルテルの悩み』解説によると、

十八世紀においては悲劇文学は戯曲の独占物であって、一般に散文小説には悲劇的素材を表現する能力はないと考えられていたが、『ウエルテル』はこの通年を打破し、また手紙という内的告白の手段を駆使した『ウエルテル』は、小説という文学ジャンルに一つの大きな可能性を切り開いた作品でもあった。

とあり、『ウエルテル』は当時の従来の小説に比べて一線を画するものであること、また、手紙という「内的告白」の性格が強い「書簡体」という形式によって、当時から現代まで変わらず高い評価を受けている。この「書簡体」に焦点をあて、その成立や展開、効果等をゲーテ『若きウエルテルの悩み』と有島武郎『宣言』の比較を中

心として、探っていく。

## 一 書簡体小説とは

### 一 はじまりと流れ

書簡体小説とは、実在・虚構を問わず、手紙を重要な構成要素とする散文の物語作品である。

書簡体の起源については諸説あるが、オウディウス『名高き女たちの手紙』（二世紀はじめ）をはじめとする書簡詩の伝統があるとされる。ラブレターを挿入した恋愛小説の形式も現れ、ディエゴ・デ・サン・ペドロによる騎士道小説『愛の牢獄』（一四九二年）などがある。十二世紀の『アベラールとエロイズの手紙』も有名な作である。十六世紀から各地で流行した〈恋愛書簡集〉のジャンルは、フィクションでありながら本物を装い、範例文集としても読め

るよう編集されていた。このことから、郵便制度や道路事情の改善、社交精神の開花に伴い手紙の習慣が普及し、日常の書信をそのまま文学の営みとするような書簡文学者が輩出した。三そして全編手紙のみという本格的な書簡体小説がフランスを中心にこぞって製作されるようになる。十七世紀のサロンにおける書簡の公開朗読がその要因であり、これはサロン芸術がそこに入りする芸術家及び芸術愛好家の私信の公開を要求した為である。公開を意識して書かれたところに普通の私信とは区別される文芸性が生じた。十八世紀に書簡体小説は盛んになり、多くの傑作が生み出された。ルソーの『ジュリもしくは新エロイズ』（一七六一〜六二年）等がある。そしてこの流行は後のロマン派の時代に至るまで続いた。けれどもその後十九世紀に入るとこの書簡体という形式は徐々に衰退して行くのである。

## 二 日記と書簡

書簡体という形式が持つ一番の特徴は私的的心情を告白・記述することに長けているという点であり、語り手＝登場人物であることが内面的告白を効果的にするのである。読み手は作者の介在抜きで人物の直接の表白に触れることとなり、〈私〉の赤裸々な心の秘密や感性の震え、些細な日常のエピソードまでも共有することができた。また、数名の人物による手紙のやりとりによって複雑な構成が生まれ、同一の事象にいくつもの視点や解釈が提出され、総体主義的価値観を読者に植え付ける、という特徴もある。

書簡体と似た形式について、日記を模す形式がある。日記文学と

言えば日本にも昔からあるものであり、代表的なもので言えば『土佐日記』（九三五年）、『蜻蛉日記』（九七五年）などがある。垣内松三氏は、「日記や随筆は自照文学である。自照文学は自己返照の文学である。自己を反省し、凝視する文学である」と規定している。小田切進氏は日記について「自分の内部でまだ混沌としているものを、自分の言葉で明確にしようとし、その意味をつきとめ、そこから自分のあるべき姿を求め、ねばり強い内面的なひとみを日記に書きしるしたのである。自己のいっさいを日記に投げだし、自己を赤裸々にして、きびしい内省と批判を加えて、苦悩や不安から自己脱出をはかるいとなみが記録されているのだ」と述べている。また、中村三春によれば、日記体は一般に三つの特徴を帯びているとされる。まず、日付によって（それが表記されていないとしても）記事間の断絶を生む反面、時間の一貫性によって連続性を確保するという点である。次に断片的な文章群でもそれが一人の主体によって書かれている点。また、公開を前提としたものもあるが、多くの場合、日記は私的な性質を持つ内密性の発話である。これらの特徴は書簡体と共通するものであるが、最大の違いは、書簡には宛名があり誰かに読んでもらうことを目的としているが、日記にはそれが無いという点だろう。綴られた日記は大抵の場合、書き手以外その他の人の目に触れない、自分が書き、自分だけが読むという内密性が前提となっている。この点では他人や作品を読む読者の目を意識しなくても良い分、内面の独白という特徴は書簡体より強く出るかもしれない。対して書簡体は、読者の目を意識しない点では同じだが手紙の宛先という他者の存在が不可欠であり、単なる独白ではなく受取人へ語られた独白となるのである。

## 二 『若きウエルテルの悩み』

第一章第一節に述べたように、「書簡体小説」は小説の形式のなかに突然現れたものではなく小説のはじまりから使われていた形式であった。『ウエルテル』の出版は一七七四年（初稿一七七四年、第二稿一七八四年）であり、そこで用いられている書簡体はその形式が読者にとって目新しいものだった、というよりはむしろ一般的で親しみやすさの方が勝っていたといえる。では、当時特にその「形式」によって注目されたわけではない『ウエルテル』が、「発表当初から圧倒的な反響を呼んで、恋愛小説として世界的成功を収め、永遠の青春の書」<sup>1)</sup>としてドイツのみならず世界文学の中で普遍作品として位置づけられ、ウエルテル効果などといった自殺の流行を生み出すほど読者を熱狂させた<sup>2)</sup>要因は何だろうか。高橋義孝訳『若きウエルテルの悩み』解説<sup>3)</sup>によると、

十八世紀の小説は、恋愛小説にせよ、旅行小説にせよ、読者に娯楽を提供し教訓を与えることを目的としていた。すなわち十八世紀は芸術や文学の本質的機能「人を娯しませることと有智であること」(prodesse et delectare)に見ていたのに対して、『ウエルテル』は根源的に人間の生き方そのものを問題にしようとした。読者の思念は主人公がなぜ自殺しなければならなかったかという点に拘わりあわざるを得ない。従来の小説では、

愛が人間の自由意志によって死に結びつくなどというところを考えられないことだった。

とあり、当時の小説ではみられない主題と結末だったようである。主軸となっている「恋愛」の他、加えてこの作品の盛り込まれたメッセージとして、「社会批判」がある。

『ヴェルター』という小説が、一方で主人公の恋愛を描いた「恋愛小説」であることは間違いないものの、他方で確かに、当時の身分制社会や市民社会自身の古陋な体質に対する激しい社会批判をメッセージとして読み取り得るものとしている点である。とはいえ当然ながら、恋愛小説であることと社会批判メッセージを発信することとは、必ずしも必然的・整合的に一致するものではなく、むしろ本格的に両者は全く無縁のものである。この両者を並行的に一つの小説の中で実現し得ている点に『ヴェルター』の新鮮さがあり、そこにこそ文学史上の画期的事件となっている一つの理由も求められるであろう（後略）

引用は相澤啓一氏の指摘である。こうした指摘以外にも、『ウエルテル』を社会批判的作品として読む解釈は様々なされているようである。恋愛物語でありながら、ウエルテルがしばしば手紙に書きつけた社会批判のメッセージは、作品全体の一貫性を損なっているという指摘もある。このような批判が最も表れているシーンがある。ウエルテルの社会生活においての重大事件ともいえる、フォン・C…伯爵宅での宴会のできごとである。彼の昼食に呼ばれたウエルテルは、夜会が始まる時間まで伯爵宅に居続けた。手紙には、

二、三知った顔とぼくは話をしたんだが、みんなどうもひどく口数が少ない。ぼくは考えた——そうしてB……嬢だけに注意を向けていた。そうすると女連が広間の片すみでひそひそ話をしていたつが、それが男たちの間にも伝わり、フォン・S……夫人が伯爵に話をして（これはみんなあとでB……嬢から聞いたのだが）、伯爵がぼくの方へつかつかと歩いてきて、ぼくを窓ぎわに引っぱって行くんだ。——「君も承知だろう、われわれの妙なしきたりをね。どうやらお集まりのお客様方には、君がここにおられるのがお気に召さぬらしい。わたしはけつしてなんと」（一七七二年三月十五日付）

とその時の状況が説明されている。ウエルテルがいることに對する上流階級の不満があり、その結果彼は追い出されてしまったのである。そして後日、その夜会に参加していたB……嬢に話を聞くと、

「一部の人たちがそのために凱歌をあげるだろうとか、他人にたいするぼくの軽蔑や高慢がこらしめられて（これはもう以前からぼくに非難されていた点だ）、連中がみな悦に入るだろうとか、そんなことまでつけ加えて話すのだ。（一七七二年三月二十四日付）

とウエルテルの行動について様々に批判がなされており、彼もこれには辟易したようである。このような場面を追加していくことによって、『ウエルテル』が単に恋愛物語というだけでなく、当時の社会を批判しているということが読み取れる。

当時の小説は今日のような文学ジャンルとしての地位を確立して

おらず、ドイツでは宮廷詩人による韻文、とりわけギリシヤ古典からの伝統を誇るとされた英雄叙事詩が文学の規範とされる一方で、小説はおろか戯曲ですらも低俗で価値の低いものとしか見なされない時期が続いた。しかし当時の貴族や裕福な市民の誰もが行う「余暇活動」として空前のブームともなっていた。自己表現の機会を求めはじめた市民にとって未知の、新しい可能性が「小説」であったともいえる。低俗なものであった小説が、「教訓と娯楽」に役立つことが認められ、イギリスやフランスの小説が翻訳され、十八世紀後半には市民の自己表現としての文学・小説の機能が徐々に発見されていった。『ウエルテル』が書かれたのは単なる娯楽でしかなかった古い小説観から脱却しようとする「小説」というジャンルが始まってすぐのことであった。このような小説の歴史という観点からみると、恋愛によって悩み最後には自殺してしまう主人公、またそこにちりばめられた社会批判のメッセージが、当時の読者たちに新鮮であり、切に胸に迫るものであったのだろう。

以上を踏まえて、書簡体という形式に立ち返る。相澤氏の指摘では、

文学史から見る観点においても、小説というジャンル自身がドイツ語圏のみならずヨーロッパ全体において大きな移行期にあったことが密接に関連しているはずである。先に触れたような荒唐無稽な筋書きを楽しめるような単純娯楽としての「小説」の時代が過ぎ去って行く中、小説を市民の関心を表現しうる文学手段へと引き上げるためには、根も葉もない虚構物語としての小説から卒業し、とりあえずは市民としての道徳規範を盛り

込みつづいていかにも身近で「本物らしい」「リアルな内容を表現する小説のトボスを完成させる必要がある、そのためには単に語られる「内容」だけでなく、語りの「形式」そのものを本物に近いリアルな状況とすることが極めて効果的だったと考えられる。

とある。読者にとって一般的で親しみやすい、つまり、『ウェルテル』に込められた恋愛・社会批判などといったメッセージは「本物に近いリアルな」書簡体という形式によって生きてくるのである。そして、『ウェルテル』において書簡体を取り上げられた理由として、この形式が主流のものであり読者の実生活に寄り添うものであること、もつと言えばこの「時代」がゲーテに書簡体という選択をさせたのであろう。

また、この「リアリテイ」を徹底するため、相澤氏は、

「一方の「リアリテイ」を確保する」という使命にとって最も有効な手段の一つとして採用されたのが、「ほんもの」のメテイヤを借りてくるという意味での書簡体形式であった（略）それ以外にもゲーテはいたるところで、新たな「小説」ジャンルの歴史的使命に応えるべく、物語があたかも現実のことであるかのような印象を呼び起こすための「リアリズム」実現に努めている。

とも指摘しており、作者ゲーテの自伝的要素が主人公ヴェルターの行動や書簡の中にふんだんに取り入れられていること、「書簡に具体的な日付を記入すること」、「わざわざ原注などを付けて『よんどころ

なき事情から地名には変更を加えてある』とロットが批判する本の題名を伏せる理由を記していることなど、これらのリアルな印象を与えるための手段は、先にも記した読者からの熱狂的な反応によって成功しているといえるだろう。

### 三 『宣言』

『ウェルテル』の日本での受容はどうだっただろうか。一八八九（明二二）年八月二日発行の「国民之友」の夏季付録であった訳詩集「於母影」において、鷗外はゲーテの詩『ミニヨン』を訳した。これが大きな文学的な反響を生んだゲーテの最初の作品といえる。中井錦城は雑誌「新小説」第十五卷（一八八九・一〇）に『旧小説』と題して『ウェルテル』の抄訳をのせた。これが『ウェルテル』翻訳のはじめである。この翻訳を批判する意味で鷗外は「国民之友」（一八八九・一〇）において錦城訳の一部を訳した。しかしこれらは抄訳というには量的にあまりにも少ない。『ウェルテル』のほぼ全貌を伝える抄訳は、一八九一年七月二三日から九月三〇日まで「山形日報」で連載された、高山樗牛による『准亭郎の悲哀』であった。その後にも翻訳の刊行は続き、大正期に入ると秦豊吉その他の訳でいつそう普及した。また、これらの翻訳に合わせ、一種のウェルテル熱が流行した。「文学界」同人の若い詩人たちの『ウェルテル』に対する傾倒は、次第に文壇全体にしみわたっていった。九書簡体という形式はこの「ウェルテル熱」によって流行したのではと言わ

れるほど、明治三十年代〜大正期にかけて多くの書簡体小説が書かれた。国木田独歩『おとづれ』（一八九七・明三十）、近松秋江『別れたる妻に送る手紙』（一九一〇、明四三）、夏目漱石『こころ』（一九一四、大三）、芥川龍之介『二つの手紙』（一九一七、大六）、武者小路実篤『友情』（一九一九、大八）などである。（資料編での『ウェルテル』翻訳作品の表参照）

日本の書簡体小説には、暁峻康隆氏によれば、『堤中納言物語』（平安時代後期）中の「よしなしごと」、井原西鶴『萬の文反古（よろずのふみほうぐ）』（一六九六年）の系譜があるが、成立時代を考慮すると西洋の影響を受けたものとは考えにくい。西鶴はなぜ『萬の文反古』において書簡体を取り上げたのか。西鶴が自ら語るところによれば、彼の書こうとするものは醜惡・猥雑・食欲・卑屈・背徳・およそ啓蒙・教訓を事とし、もしくは唯美的であつた先輩作家たちによつて否定され隠され続けてきた人間の弱点だった。西鶴の文学精神は美や正義や崇高について語ることも、それらを希求してやまない人間の正体を知りたいとするものであつて、またそのような隠れた人間の秘密を表現するのに最も自然で適切な方法として書簡体を選んだのである。この西鶴が指摘した「人間の秘密」、つまり内面を表現するという書簡体の性質は、起源は違えど西洋での書簡体のそれと通ずるところがあるだろう。

しかし、『青年文』『小説の新文体』（一八九六年一月二十八日）に書かれた青年記者の記事によれば、『文藝倶楽部』の第二巻第十一号に掲載された水野醉香氏の『新編文反古』について、

此小説は往復の書簡を集めて構成したるものにして、我國の文

界に於ては実に最初の新体なりとす。欧米の文界にては此体珍しからず、不学吾人の如き者すら、ゲーテのウェルテル、又はコリンズの諸小説等に於て之に接したることあり、猶ほ他に多くこれあるべし。書簡又は日記の文を以て一編の小説を構成するの利益は、多々これあるべしと雖も、読者に新奇を感じしめ得ること、其主人公の意思を奥底まで写し得ること、如何にも總ての出来事をして実在らしく思はしめ得ること等は、普通の叙記体の及び難き長所なり。

とある。当時こうした『堤中納言物語』中の「よしなしごと」、『萬の文反古』などといった日本独自の書簡体の流れがあることはあまり知られていなかったようである。やはり明治以降の書簡体小説は明治維新による西洋文学の流入が軸となっているのではないだろうか。

これらを踏まえ、日本での書簡体小説として有島武郎『宣言』（一九一五）を取り上げる。書簡体小説であること、そして恋愛を主題にしており主人公がそれに敗れていることが『ウェルテル』と共通していること、また、有島の幼少期に受けた教育やキリスト教体験など、彼の書く作品も西洋の影響を大きく受けているのではないかと推測したからである。『宣言』の着想については諸説あり、安川定男氏によれば本文中に引用されているメーテルリンクの戯曲『アグラウェーンとセリセット』（一八九六）から、中村三春氏によればルソーカリチャードソンあたりの作品から得たとされている。小坂晋氏は、『宣言』の話の筋は足助との手紙で得たが、具体的な形式や展開、主題は『ウェルテル』から得たものだとしている。実体験と

して挙げられている親友足助の手紙だが、『宣言』の発表に先立つこと二年前、一九一三年十一月三日付けの日記をみると、足助は同年三月ごろからの恋愛に苦しみ、有島に人生観を述べてほしいと手紙を寄こし、二人の間にしばしば手紙の往復があったようである。有島は足助宛の手紙に、「魂と自己」についてベルグソンとホイットマンを引用して論じており、小坂氏は、この思想的な手紙達は『宣言』前半のAとBの往復書簡に取り入れられているとしている。この実体験と『宣言』との共通点はこの他にもあり、「足助が恋した少女はY子と同様に継母のもと孤独な生活を送っている悲観的な性質を持つ一人娘であること」、「足助と少女の結婚は不可能であり恋愛は悲劇に終わること」、「足助に妹があり、父親の死によって遺産相続などの親族会議が開かれたこと」、「足助の度重なる手紙に対してBの如く有島が怠りがちであつてこと」などが挙げられている。これらの実体験が『宣言』の基になっていることを考えると、ゲーテが自らの体験を軸として書いた『ウェルテル』を多少なりとも思い起こさずにはいられない。

有島とゲーテの出会い、一九〇六年十二月十日付の日記によれば、当時十八歳の有島が詩集を読み強い印象を受けたことに始まる。農学校時代には内村の求安録に抄訳された『ファウスト』の夜の默想を心深く読み、新渡戸稲造の講義でゲーテに対する印象はますます強いものとなった。特に『ウェルテル』においては、「特に森本（厚吉）との霊肉二元の苦悩が始まつてから、『ウェルテル』は有島に天啓を与え、一夜は森本の手に一夜は有島の手に渡り、表紙の薄い紙は落ち、ページに赤・青の傍線や涙痕を留めた」ほどであり、有島にとって特別な作品となつたようである。また小坂氏は、「有島が『ヴ

エルテル』に異様に惹かれたのは、有島とゲーテの内面・精神構造に共通する面があつたからと思われる」と言及しており、

「宣言」に奔騰する青春の情熱が「ウェルテル」と共通しているのは、躁型と鬱型の違いあつたとしても有島がゲーテに似た精神構造を持つていたため、心の底から「ウェルテル」に揺すぶられ動かされ、潜在意識の奥底まで影響を受けていたからである。『ウェルテル』が後年に至るまで潜在的に尾を引いていたことは、有島の自殺直前の行為を見ても分かる。ウェルテルが自殺の直前、恋人ロッテの前でオシアン之歌を朗々と吟じた如く、有島も「大道の歌」を昂揚した状態で朗じ、死地に赴いたのである。

と述べている。有島が青年の頃受けたゲーテからの強い印象は、彼の人生の最期にまで影響を与え続けたようである。

#### 四 『宣言』と『ウェルテル』

両作品において共通するのは、書簡体という形式と、その主題が恋愛だということ、そしてどちらも三角関係に陥っていることである。『宣言』の方ではA、B、Y子、という構図であり、『ウェルテル』ではウェルテル、ロッテ、ロッテの婚約者であるアルベルト、という構図である。これらの関係について相違点などを、それぞれ

本文に即して見ていく。『宣言』よりAによるB宛の手紙には、AのY子への恋心がつぶさに書かれている。そこから一部を抜粋する。

僕は黙って歯がみする。僕は僕自身の弾効に手向いのできる何の力も持っていない。しかし僕には一つの尊い直覚のある事を知っている。そして運命には後ろに髪のない事を知っている。彼女の髪一筋は、彼女が僕のものである事を僕に信じさせる。そしてその機運は今熟している事を感じさせる。僕はもちろん未熟な一青年に過ぎない。僕の容貌は女をひきつける何物もない。しかし僕は、今まで、一生の苦楽を共にする女性に与えるために、この心とこの肉とを、能う限りの努力をもって淨く保つて来ているのだ。僕は若い。そして今こそ一つの仕事もしてかしてはいないが、生きる限り、内に潜む強いもの、美しいもの、尊いものを現わす気力と大望とを失いはしない。彼女が既に恋を知っているとするか。よし、それなら僕はそれ以上の恋を知らして見せる。ほんとの恋がどんなものだかを味わわしてやる。僕は彼女に対してそういう運命を持つと直感するのだ。

(一九二二年一〇月六日付)

僕は、神の摂理によつてアダムがエバを見たように、彼女を見たのだ。(略) Y子は僕の繊維の一つずつ、細胞の一つずつにもしみわたっている、ちようとすべての露の上に月の影が宿るように。僕はあまりにY子に飽和して現身のY子を要しないと思う事さえある。しかしそれはうそだ。うそだ。僕はY子の心、肉、髪の一筋、黒子の一つでも自分のものになければ満足し

ない。満足ができない。(略) 僕はいても立ってもいられなくなる。そして僕は幾度か、そうだ幾十度か、心の中で叫びながら誓った。「おれはきつと彼女を幸福にしてやる。僕等二人はいちばん幸福にならなければ満足しない。彼女を助けてください、救ってください、最上の道をあやまらずに歩かせてください。」

(一九二四年二月二日付)

また、ウエルテルが友人ウイルヘルムに宛てた手紙の中にも、ウエルテルのロッテに対する恋心が記されている。同じように一部抜粋する。

二時間、あるいは三時間、彼女のそばにいて、彼女の姿、振舞い、やさしい言葉づかいにたのしい思いをして、そのうちやがてぼくのいつさいの感覚が緊張し、眼の前が暗くなり、何事も耳に入らなくなつて、喉を暗殺者にでも締めつけられるみたいな気持ちが生じてくると、胸苦しいあまりにせめて息を吐こうと心臓がはげしくうちだし、そのためにかえつて気持ちが干々に乱れ——ウイルヘルム、本当なんだ、自分が生きているのか死んでいるのか、わからなくなるんだ。(一七二二年八月二十八日付)

ぼくだけがロッテをこんなにも切実に心から愛していて、ロッテ以外のものを何も識らず、理解せず、所有してもいないのに、どうしてぼく以外の人間がロッテを愛する、か、愛する、権



利があるか、ぼくには時々これがのみこめなくなる。(一七七二年九月三日付、傍点ママ)

ウエルテルとAに共通するのは、ロッテ、Y子に対する強い恋心とそれがもたらす苦しみであり、Bの言葉を借りれば「ただ燃えよ。燃えて愛せよ。」というに尽きるような恋愛の情熱である。このウエルテルやAにとって心や思考の大部分を占める、または占めざるを得ない恋の炎はこの世における至上のものであり、彼らの苦しみと喜びを生み出す大きなエネルギーであった。このような恋愛の情熱が『ウエルテル』において、また『宣言』において最も重要なテーマであり、それをスタート地点として物語が始まり、それぞれの三角関係が変化して行くのである。そしてこの恋愛至上主義は、ウエルテルに自分の実体験を投影したゲーテはもちろん持つものであり、それは有島においても同様であった。先に述べた有島の最期にも、有名な作である『惜しみなく愛は誓う』にも表れている。

また、この主題において相違点を挙げるとするならば、ウエルテルとアルベルト、AとB、またアルベルトとロッテ、BとY子の関係であろう。

ウエルテルとアルベルトという普通ならライバルとも言うべき二人だが、当初はロッテの存在が不可欠であるとはいえ友好的な関係であった。ウエルテルのアルベルトの印象は「好意を寄せずにはいられない立派ないい人」であり、ウエルテルの手紙によればアルベルトの方でも「しつかり者のアルベルト、彼は気まぐれな不機嫌によつてぼくの幸福を乱すようなことをしないで、心からの友情でぼ

くをもてなしてくれる。彼にとつてぼくはこの世の中でロッテにつぐ存在なのだ」という具合であった。しかしこの二人の関係もしだいに友好的なものではなくなつて行くのである。その最たる原因はやはりロッテの存在であろう。ウエルテルは「ぼくがもし彼女の夫だったら、彼女がぼくの妻だったら」、「もしアルベルトが死んだら、お前(ウエルテル)は、ロッテは、などといつて考えてしまふ」のである。加えてロッテとの結婚をさほど喜び楽しんでいうにもみえないアルベルトに対して不満を持つようになる。そして、ウエルテルが自殺を強く決意した際のロッテへの手紙にはこう書かれている。

そうだ、ロッテ、黙っている必要がどこにあります、ぼくら三人のうち、誰か一人が引つ込まなければならぬ。ぼくがその役を買つて出るんだ。白状するとぼくの引き裂かれた心の中を、しばしば——あなたの夫を殺そう——あなたを——自分を殺そうという考えがそつと狂いまわつていたのです。(一七七二年十二月二十一日、未投函、自害後机の上で発見されロッテに手渡された)

初めは友好的に見えたウエルテルとアルベルトの関係は、ロッテへの愛のために徐々に破綻して行つた。ウエルテルの自殺の数日前にはアルベルトの方でも、ロッテにウエルテルをなるべく遠ざけるようにと言いつけるのであった。ロッテを至上のものとするウエルテルにとつてアルベルトはただその婚約者以外になり得なかった。

一方でAとBは深い友情で結ばれている。Aの手紙では肺結核であるBを気遣う言葉が文面に数多くみられ、Bの方ではAの恋愛に

対する助言が多く見られる。互いに親友と認めているからこの誠実な態度は作品に一貫しており、失われることがない。しかし結果的にこの恋愛と友情の相克によってAは苦しむこととなり、Bを安易にライバルと位置づけることも、さらにはウエルテルのようにいつそ自殺という選択ができないのは、この二人の友情が深すぎてしまったのも一因ではないだろうか。

次にアルベルトとロッテであるが、ここに見られるのは極めて穏やかな夫婦生活である。

自分は今では現在の夫と大きく結ばれている。夫の愛情と真実もよくわかっているし、自分は心から夫を愛している。堅気な女性が自分の生活の幸福を築くには、現在の夫の落ち着きと頼もしさは、まるで天から賜ったといってもいいようなものだと思われる。

とロッテは考えるが、その一方で、

ウエルテルも自分にとつて掛け替えのない存在となっている。相知つた最初の瞬間から、二人の心はいかにもびったりと調和していて、ウエルテルとのながい交際の間にいるいると一緒にならなかつた折々は、自分の心にぬぐいがたい印象を残している。面白いと感じたもの、面白いと考えたものは、ウエルテルとともにこれを相分かつのが常であった。ウエルテルが離れてしまえば、自分という存在に二度と埋めがたい空隙がばかりと口をあけそうに思われる。(略)自分は実は心ひそかにウエルテルを自分のものになりたいと切望しているのだということを、無

意識ではあるが深く感じた。ところがそれと同時に、彼と自分のものにすることはできもしないし、許されもしないと自分にいいかせた。

と、ウエルテルが自分にとつて重要な存在であったこと、「自分のものにしたい」と無意識に考えていたことに気づく。結婚という面でアルベルトは立派な人であり、不満もなく、愛し合っている。けれども精神の面において自分に寄り添うのはウエルテルであった。

BとY子の愛はBのもとと持つ高い精神と、次第に開花するY子のそれとがびったりと合致した結果である。それはY子がAとの婚約を破棄するほどであり、また肺を患っている二人が生への力強い希望を見出すエネルギーともなったであろう。

以上のことから、両作品に描かれた恋愛には、友情と結婚と精神とのそれぞれとの相克の問題があるように思われる。

そして『ウエルテル』に、「恋愛」という主題のほか「社会批判」というテーマも込められていたことは先に記した通りであるが、『宣言』にもまた別のテーマがあったように思われる。それはつまり「宗教」であった。作中ではBがAのキリスト教信仰の導き手となっており、Bが二十四歳の時、教会に登録されたクリスチャンであることを否定し脱会して、彼は新たな人生を模索している。一九一四年一月十日付のBによるA宛の手紙には、教会を脱する旨について書かれており、その理由は第六か条として掲げられている。

これは明治三十二年に入信を思い定め、三十四年に正式に入信し、四十三年に教会を退会した有島の実人生に似通うところがある。しかしこの実人生において有島の入信は友人森本厚吉の強引な勧誘に

よるものであり、一概にBⅡ有島であるとは言えないようである。  
佐々木泰章氏は、

潔癖な武郎にとって、キリスト教は青春期の性欲を自制し否定する格好の倫理的支えとなり得た。性欲の否定は、恋愛感情の否定にまで武郎を赴かせる。武郎の入信は、結局、弱者たる自己を克服し、理想の高みに自己を飛躍させ、強者を偽装するべくなされた自己救済の行為であった。

と指摘している。Bの第六か条は多少の程度の差はあれど有島の脱会の理由とも通じるところがあるだろう。特に第三条には、「僕の信仰は、明白に言えば酔興だった。自分の性格の根底に触れる事をおそれていた僕は、酔いによって、自己の空虚を忘れようとしていたのだ」とあり、まさに「弱者たる自己を克服し」、「強者を偽装するべくなされた自己救済の行為」であった。この偽装や、性欲・恋愛を否定することは、有島にとって自己欺瞞以外のなにものでもなかったであろう。Bの脱会後に彼がY子との恋に落ちたということもそれを示している。

ここでまたもう一度「書簡体」の形式について立ち返る。両作品は同じ形式を用いたものであるが、違いが二つあるように思われる。まずは『ウエルテル』が主にウエルテルによる一方的な書簡で物語が展開して行き、ウエルテル位以外の登場人物が、自らの心情を自らの言葉で語るシーンが最後までみられないのに対し、『宣言』ではAとBの往復書簡であり、さらにY子の手記と合わせて、すべての登場人物が自らの心情を自らの言葉で語っているのである。

これは、作者がどの人物に自己投影を図ったかという差によるものではないかと推測する。ゲーテの場合は主題の恋愛において実体験と自己の恋愛観をウエルテルのみに投影しているため、ウエルテルの手紙のみが掲載されている。ここにウエルテルⅡゲーテの構図がみられる。この構図はもう一つのテーマである社会批判においても、ウエルテルによる社会批判Ⅱゲーテによる社会批判と適用されるのではないか。しかし『宣言』では、有島の恋愛観からみればAⅡ有島という構図が出来上がるが、その着想を実体験である友人足助との書簡から得たとすればBⅡ有島、宗教というテーマにおいてもBⅡ有島という構図になる。Y子にしてみても、精神の開花を果たした彼女が本当の愛に生きることを選択したことを考えれば、有島ⅡY子という構図も可能であるかもしれない。有島の思想がすべての登場人物に投影すると考えれば、往復書簡、つまり彼らの書簡・手記がすべて明かされているこの形式をとったことも頷ける。

また二つ目の違いは、先に述べたように『ウエルテル』の書簡体は、当時主流のものであり読者に対する親しみやすさ・読みやすさなどの「リアリティ」によって採用されたものである。それに対して、『宣言』が書かれた当時はたとえそれが流行していたとはいえ、一人称や三人称で書かれる小説が主体であったろう。それでもあえてこの形式を選んだのは、書簡体の特徴である内面的独白を前面に押し出しているためではないだろうか。有島の思想がA・B・Y子に分散されていると考えれば、書簡体という形式はこのそれぞれの内面を表すのに適した手段であったのかもしれない。

## おわりに

以上のことをまとめる。書簡体小説は十七・十八世紀ヨーロッパで大流行した形式であり、それは手紙が当時の人々の生活に密着したものであったからである。「小説」が持つ自己表現という機能が上流階級だけでなく市民にも発見された時代であったため、彼らの手紙のやり取りが次第に虚構をもつて描かれるようになり、そこに彼ら自身の内面を、思考を散りばめていった。ヨーロッパにおいて「小説」の始まりは「手紙」に由来すると言っても過言ではない。そしてその頃書かれた書簡体小説『若きウエルテルの悩み』は当時ヨーロッパで大成功を収めることとなった。ここに描かれたのはウエルテルの恋愛における苦悩である。また当時の身分制度などにおける社会批判のメッセージも組み込まれていた。これらのウエルテルの思考を書き出すのに「リアリティ」が求められ、当時主流であった書簡体という形式が採用されたのである。

一方で日本では百年ほど遅れてこの『ウエルテル』が翻訳され、その際には当時ウエルテル熱が流行したほど当時の文壇に影響を与えた作品であった。同時に書簡体小説の流行を起したとも言われている。『宣言』はちょうどその頃に書かれた作品であり、多少ながらも『ウエルテル』の影響を受けている作品と言えるだろう。『宣言』は有島の実体験が基になっていると考えられるが、ここに描かれた「ただ燃えよ。燃えて愛せよ」といったような力強い恋愛の情熱は『ウエルテル』にも共通するところがあり、両作品とも恋愛と友情・結婚・精神の相克の問題を孕んでいる。この恋愛観は作品だけでな

く両作者にも共通する精神であった。

また、『宣言』には『ウエルテル』における「社会批判」というテーマのように、恋愛とは別のテーマがあるように思われる。それが「宗教」であった。作中でキリスト教会を脱したBのように、有島自身も教会を退会した経験を持っていた。宗教によって救われる自己に欺瞞を感じたためである。このような恋愛や宗教における心の葛藤を表すのに、内面的独白という特徴を持った書簡体は最適なものだとして、『宣言』において採用されたのではないか。また、グーテはウエルテルにおいてのみ自己を投影しているが、有島は『宣言』で実体験においてはB、精神や思想においてはAに自己を託している。これが両作品の決定的な違いであり、書簡体という形式の中でもとりわけ往復書簡の形式を用いている所以である。

今ではこの形式はその他多くの文体と並んでいるが、書簡体小説は、手紙の持つ特徴から自己表現としての小説を大いに発展させ、小説の歴史の中で重要な役割を持った形式であった。書簡体小説を研究することは小説の始まりを知ることであり、文学を学ぶとき、忘れてはならない形式であると言えるだろう。

## 参考文献・資料一覽

- ゲーテ 高橋義孝訳『若きヴェルテルの悩み』(新潮文庫、一九五一・三)
- 有島武郎『宣言』(岩波文庫、一九六八・七)
- 『現代日本文学全集 二十一 有島武郎集』(筑摩書房、一九五四・四)
- 暉峻康隆『日本の書翰体小説』(越後屋書店、一九四三・八)
- 安川定男『有島武郎論』(明治書院、一九六七・十一)
- 中村三春『言葉の意志 有島武郎と芸術史的転回』(有精堂出版、一九四・三)
- 相澤啓一『若きヴェルターの悩み』における書簡体小説の終焉(『文藝言語研究文藝篇』(三十四)、一九八八)
- 小坂晋『宣言』試論(『国語と国文学』四十五(十二)、一九六八・十一)
- 佐々木靖章『宣言』における青春回復への祈り——有島武郎とキリスト教の一断面——(『文芸研究』第八十八集、一九八七・六)
- 平井守『ヴェルター』と『ヒュペーリオン』 書簡体小説の限界として(『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』(三十二)、二〇〇〇)
- 小田切進『近代日本の日記』(講談社、一九八四・六)
- 佐藤泰正編『日記と文学』(大文社、一九八五・六)
- 古川裕朗『ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』における「勇氣」の美学——自然風景の雰囲気論的解釈——(『広島修大論集』二〇一三・一〇)

『比較文学辞典』(東京出版、一九七八・一)

『図説 翻訳文学総合事典 第二巻 原作者と作品(一)』(大空社、二〇〇九・十一)

『万有百科大辞典』(小学館、一九七三)

『世界文学辞典』(集英社、二〇〇二・二)

『文藝時評大系 明治編』(ゆまに書房、二〇〇五・十一)

日本雑誌協会 日本書籍出版協会 五十年史『web版』

<http://www.jpba.or.jp/henshi/top.html>

中村三春ホームページ

<http://web.ec.hokudai.ac.jp/01488/index.php>

ニプリウス・オウイデウス・ナソ(紀元前四十三年三月二十日〜紀元一七年) 古代ローマのアウグストゥスの時代に生きた詩人。

ニディエゴ・デ・サン・ペドロ(一四三七年〜一四九八年スペイン)。

二の大きな流行によって「ヨーロッパにおいて一七四〇年から一八二〇年までの期間に一〇〇以上の書簡体小説が出版をされ、ドイツでは「一七七〇年から一八一〇年の間に名を成した天分のある作家の内、何らかの書簡形式の作品ジャンルを手を出すことがなかったのは唯一ノヴァーリスだけであった」とも言われるほどである。

四主として一八世紀末から一九世紀前半にヨーロッパで、その後にヨーロッパの影響を受けた諸地域で起こった精神運動の一つである。それまでの理性偏重、合理主義などに対し感受性や主観に重きをおいた一連の運動であり、古典主義と対をなす。恋愛賛美、民族意識などの高揚といった特徴をもち、近代国民国家形成を促進した。その動きは文芸・美術・音楽・演劇など様々な芸術分野に及んだ。のちに、その反動として写実主義・自然主義などを果たした。

五相澤啓一『若きヴェルターの悩み』における書簡体小説の終焉(『文藝言語

研究文藝篇（三十四）、一九九八

六『ヴェルター』が一般読者からの熱狂的な支持を得た一方で、不倫の賛美、自殺の容認、宗教の冒瀆、市民的有能さの嘲笑という理由から『ヴェルター』を批判する批評家たちも少なくなかった。ところが、こうした批評は読者を獲得する上での障害ではなくむしろ後押しになったという。（古川裕朗）「ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』における「勇気」の美学——自然風景の零囲気論的解釈」『広島修大論集』二〇一三・一〇）

七高橋義孝訳『若きヴェルテルの悩み』（新潮社、一九五一・一）

八ちなみに製菓会社ロッテは『ヴェルテル』のシャルロットに由来するものである。

九若い作家たちばかりではなく、外国文学嫌いを自称する尾崎紅葉でさえもヴェルテル熱にとらえられ、胃痛を宣告された夜には「泣いてゆくエルテルに会う臆かな」という一種の辞世の句を残したほどである。

一〇ちなみにこの表についてだが、昭和二十年代には他の年代にはみられないほど多くの翻訳が出版されている。『日本雑誌協会日本書籍出版協会五十年史』には、

敗戦によって日本の出版体制は大きく変わった。一九四五年（昭和二十）統制団体の日本出版会が解散し、新たに日本出版協会が初足する。四十六年には公職追放令により、戦争に協力したとして出版関係者からも職を追われる者が出た。四十八年には国立国会図書館が創立され、それにとともに出版物の納本が義務化される。出版法、新聞紙法が停止され、出版事業令が廃止されるなど、戦時中からのさまざまな統制が解除され、にわかに出版活動が活性化する時期であった。休刊していた雑誌がいくつかで復刊し、新雑誌も次々と創刊される。出版社も激増し、四十八年にその数は四五八一社と、それまでの最高を記録した人びとは活字に飢えていたのだ。出版物であれはなんでも売れるといわれるような状況が生まれたのだ。

と述べられている。終戦で各種統制が解除され、出版が比較的自由にできるようになり、また書物の需要も増えたのである。『ヴェルテル』の翻訳作品が昭和二〇年代において急増したのは、この出版ブームの影響ではないかと推測する。